

---

## Interlude of Love 1

壇 敬

---

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Interlude of Love 1

### 【Nコード】

N6211M

### 【作者名】

壇 敬

### 【あらすじ】

大人の恋愛を書きたかった。離婚や死別したシングル同士が、若い頃の恋愛をなぞりつつ、それでいて大人の恋愛の仕方を優しく書いてみました。

## いつものデート（前書き）

おじさんやおばさんは枯れてないよ。  
そんな雰囲気きふきを小説にしてみました。

## いつものデート

夜の帳が下りたが、街の灯が輝きを増し始める、午後8時を過ぎたホテルのロビーは、街の灯から想像するよりも人が疎らだ。

宵の口のこの時間、アーバンなシティホテルは潤んだような雰囲気醸し出している。駅の近くだが、メインロードから脇に入った場所で、ひっそりと佇むレンガ造りの小さなシティホテル。目立たない外装が気に入って利用しているのだ。

そして、このホテルのロビーの雰囲気も好みなのだ。ソファはバツクスキンレザーの風合いに加えて、硬過ぎず柔らか過ぎずの程良いコイルスプリングが、私の身体をリラックスさせてくれる。だが、ドツカリと座った感じではなく、程々に緊張感を与えてくれる背もたれの角度と、低過ぎない座面を持っているのだ。

ロビーの白の内装材が少しくたびれていて、何とも言えないアイボリー色を湛えているのもいい。フロントのオークのカウンターや、その後ろのオークのロッカー、そして、修練されたフロントマンの雰囲気、その全てが私をリラックスさせてくれた。

こんな時間に、こんな所で待ち合わせるのは、私のような、少し藁が立つた者くらいだろう。そこで、ゆっくりとタバコを燻らせながら、香りが抜け切ったレギュラーコーヒーをすすった。既に過去の事柄になったことが書かれている朝刊を広げて、そこに視線を落として読む振りをしながら、私は淑恵を待っていた。

しばらくすると、清楚な印象の女性が1人、ロビーの両開きの自動ドアが開いて入ってきた。短めのマッシュルームレイヤーカットで、後ろは衿足の厚みを削った前上がりのレイヤーカットの、スレNDERな髪型。バテンレースをあしらった若草色のカットソー・プルオーバーに、オフホワイトのシルクコットン・テラードジャケット。ブラウン系のチュールネット・プリントスカートに、ダークベージュのプラットフォーム・サンダルを履いた、それが淑恵だった。

た。

私は、すぐにそれとは気が付かなかったが、淑恵はロビーに入っ  
てすぐに私に気付いたらしい。淑恵は私の後ろから静かに近づいて、  
そつと私の肩に手を置いた。私はビクツとして新聞を持ったまま振  
り返った。

そこには、淑恵の笑顔があった。

「驚かせちゃったみたいね、ごめんなさい」

そう言って、淑恵は私の方を向いたまま、私が座っているソファ  
の、そして私の横に座った。

「ごめんなさい、ちよつと遅れて」

私は目を落としていただけの新聞を畳んで、テーブルの上に置い  
た。

「こんなの、待ったうちに入らないよ」

私がそう言くと、淑恵は微笑んだ。そして私の膝に手を置いた。

淑恵の、肉が落ちて細くなった、しかし暖かい掌の感触が私の足に  
伝わってきた。私の膝に置いた淑恵の手に私の手を重ねた。そして、  
私は淑恵を見つめて言った。

「じゃ、行こうか」

淑恵はゆつくりとうなずいて応えた。

「ええ」

私が淑恵の手を握ったまま、ソファから立ち上がり、淑恵もそれ  
に伴った。そして、ロビーから2階へ上がる階段に向って歩き始め  
た。

私と淑恵は、このホテルの2階にあるメインダイニングの、ステ  
ーキハウスがお気に入りだった。ステーキというよりフランス料理  
に近かったが、地元の国産和牛で売り出しているレストランだった。  
私と淑恵は、ギャルソンに案内されて、向き合いの2人席に座った。  
コアントローの食前酒で乾杯し、前菜のハムと野菜のサラダに手  
を付けた。テーブルに灯されたキャンドルの揺れる炎に、淑恵の顔  
が美しく照らし出された。ドイツ産のフルボデイの赤ワインを選ん

で、デキャンタでサーヴしてもらった。メインディッシュのフィレ肉のステーキに舌鼓を打ち、デザートの木苺のトライフルで閉めた。

私はタバコを2、3本十分に燻らせて、ゆっくりとコーヒーを飲み干した。淑恵はハーブティを自分のカップに注ぎながら、をジッと見つめて、話に華を咲かせた。

十分に食事を楽しんだ私と淑恵はダイニングを出た。そして、フロントに向った。

「503号室でございます」

そう言ってフロントマンは恭しく、プラスチックのカードキーを私に手渡した。受け取った私は、淑恵と共にエレベータに向った。

昇りのスイッチを押すとエレベータはすぐにドアを開いた。私と淑恵はゆっくりと乗り込んだ。ドアが閉まると、淑恵は私の腕にしがみ付いてきた。

5階を示すランプが点灯するとドアは静かに開いた。淑恵は私の腕にしがみ付いたままエレベータを降りて、右手に折れて、503号室に向ったのだった。

## いつものデート（後書き）

1年ぶりの投稿です。チマチマ書いていました。感想など、お寄せいただけたら幸いです。

## ホテルの朝

ホテルの客室の窓から朝日が差し、はまぶたを通して透ける陽の光で目覚めた。すると、私の正面には淑恵が横たわっていた。淑恵は、シーツにくるまれたまま、じっとこちらを見ていた。そして、私が目覚めたのを確認してから微笑んだ。

「おはよう」

淑恵は私の頬に人差し指を当てて、そう挨拶した。私は、大きくゆつくりとまばたきをしてそれに応えた。

「眠れた？」

私が淑恵にそう尋ねると、淑恵は大きくゆつくりとうなずいた。

淑恵は、ベッドから起き上がるとシーツをまとったまま、バスルームの方へと消えていった。私もベッドから起き上がり、ソファに放り出した服を、もどかしく着始めた。

シャツを着て、ベルトを留めたところで、客室内のパウダールームへと向かった。そこには、すっかり服を着て、髪をブローしているが、まだまだスツピンの淑恵が居た。私は淑恵の後ろからそっと近づいた。前面全てが1枚鏡だから、淑恵も知覚しているはずなのだが、淑恵の後ろから腰に手を回して、抱きしめても抵抗はなかった。

「ダメよ。くすぐったいわ」

淑恵は笑いながら、僕をいさめた。僕は、淑恵からドライヤーを奪って自分の整髪をし始めた。

「すぐに邪魔をするんだから」

そう言つと淑恵は脇に退いて、小さなポーチから化粧品を取り出した。

「化粧しなくても綺麗なのに」

僕が淑恵の顔を覗き込んでそう言つと、淑恵は照れた。

「そんなお世辞を言つてもダメよ。とうに、お肌は曲がり角を曲が



っちゃったもの。お手入れと予防だけはしっかりとしなきゃ」

僕はソファのところに戻って、ネクタイを締めた。

しばらくすると、淑恵がパウダールームから出てきた。

「じゃ、朝食に行きますか？」

「ええ」

僕が促すと、淑恵はドアの方に向き直って歩き始めた。

私と淑恵は「夫婦」ではない。だからと言って「不倫関係」ではない。強いて言うならば「恋人同士」であろうか。

そう言えるのは、私と淑恵はお互いに『独身』だからである。だが「恋人同士」と言うには、少々気恥ずかしい年齢ではある。私と淑恵は、今の流行り言葉でいう「アラフォー」なのだ。だからと言って、私と淑恵はズーッと独身だったという訳ではない。

私は20代最後の歳に結婚したのだが、子どもはいなかった。連れ合いが結婚後3年で召されたのだ。妻は乳癌だった。婚後に判ったのだが、それを見つけたのは私だった。とてもツライ想いをしたし、実際に悲しかった。それからの私は結婚をためらうようになった。連れ合いを持たなければ、憂き目には逢わない。悲しい想いはもう御免だと思ったのだ。それから、IT関連でも割と地味なネットワーク管理者として、仕事だけに打ち込んできたのだ。

それでも、時としてアバンチュールを求めたが、それはその時の恋愛にしか過ぎなかった。淑恵とのことは、そんなアバンチュールの1つだった。

淑恵は7年前に協議離婚したのだった。6年間の別居生活を経た後、お互いに他人行儀で実にドライだったので、調停の時には拍子抜けしたと裁判官が漏らしたらしい。

淑恵の仕事は、アクセサリーの製造販売会社の共同経営者で、立場としては「専務」扱いである。学生時代から活動を始めて、学校を出てすぐに学友と会社を設立したらしい。20代半ばで結婚したが、婚後も仕事を続けて、子育ても頑張ったという。離婚当時に1

4歳だった娘さんは既に社会人で、今年の初夏に結納を済ませ、来春に結婚式が控えていた。

こんな2人の状況の時に、私と淑恵は出会ったのだった。

## ホテルの朝（後書き）

感想をいただければ、幸いです。

## 出会い

ホテルの2階でエレベーターで降りて、ホテルのダイニングに向った。

ダイニングでは、アメリカンスタイルのブレックファーストを提供していた。要するにバイキング形式のビュッフェである。

私と淑恵は、窓際の差し向かいの席をチョイスした。

生クリームたっぷりのフワフワスクランブルエッグに、ベーコンとソーセージ、ハッシュドポテトを皿に載せ、クロワッサンとバターロールにブルーベリージャムを選び、レタスとキャベツのスライスサラダにオニオンドレッシングを掛けて、オレンジジュースを添えて私は席に着いた。

淑恵は、目玉焼きにポテトサラダ、スパムを皿に取り、パンはベークルでオレンジマーマレードを選び、

季節のフルーツの盛り合わせにヨーグルトを掛けて、グレープジュースを添えて席に着いた。

「貴方は、いつも同じね」

「君だって同じじゃないか」

淑恵はフッフと笑い、私もそれに釣られてニヤリとした。2人でこやかに笑いながら食事を摂った。

「出会った次の日の朝もこうだったわね」

淑恵は、ベークルを千切ってマーマレードを塗った。

「そうだったかな？」

僕がカリカリに焼けたベーコンを頬張りながら答えた。その様子に、淑恵は肘について訴えた。

「ええ！ 忘れちゃったのお？」

淑恵の言葉に、僕は頭を掻いて照れ隠しをした。淑恵は少しふくれたが、すぐに笑顔に戻った。

「そうよね。特別な感じで出会った訳じゃないけど」

淑恵はフォークでポテトサラダを突つついた。

「偶然だらけだったわね」

僕はクロワッサンをボロボロとこぼしながら口に入れた。

「そうだったね。それは憶えているよ」

そう言つと、淑恵はキウイをフォークに刺してから、僕に微笑んだ。

本当にちよつとした出会いだった。決してドラマティックな出会いなんかではなかった。

京都市の新幹線の指定席で、たまたま隣に座っただけだから。もちろん、僕も淑恵も仕事での出張だった。東京を発する時は、まったくの無口だったが、京都に到着した時には、夜の待ち合わせを約束していた。

何がキツカケだったのだろう。たぶん、ホントに、些細な言葉を掛けたのだと思う。確か、熱海までは静かだったのは記憶している。やっぱり、今だに思い出せないままだ。淑恵に訊いても、やはりそう答えるのだった。

京都での仕事を終えて、この日はなぜか接待が無かった。私はそんなに期待はしていなかったが、時間は十分にあったので、待ち合わせ場所に向つてみることにしたのだ。すると、既に淑恵がそこに居たのだ。

「こんばんは」

淑恵にその声を掛けると、僕に微笑みかけた。

「来てくださったのね」

僕と淑恵は、しばらく京都の町を散策した後、体の良い居酒屋に入った。

お互いに、仕事の話や自分の身の上を話したりして、楽しい時間を共有した。

居酒屋を出てから、何気なく宿泊先を聞くと、なんと偶然か、同じホテルだったのだ。淑恵と一緒にホテルに戻って、ホテルのバ

ーラウンジのオリジナルカクテルで飲み直した。

部屋へ戻ろうと、2人でフロントに向った。

「311号室」

僕はフロントマンに部屋番号を告げた。すると淑恵は驚いた。

「私の部屋、312号室よ！」

淑恵はフロントマンからカードキーを受け取った。

「偶然もここまで来るとスゴイですよ」

「ホントね」

そう言いながら、僕と淑恵はエレベーターに乗った。エレベーターを降りて僕の部屋の前に着くと、僕は社交辞令のつもりで言った。

「部屋に寄ります？」

淑恵が下を向いて少しためらっていたので（無理しなくていいですよ、冗談ですから）と、僕が声を掛けようとした時、淑恵が反応した。

「ええ」

僕は、淑恵を部屋に招き入れた。淑恵は、潤んだ瞳で僕の部屋に入ってきた。

## 出会い（後書き）

感想をいただければ、ウレシイです。

## 次の約束

「部屋に寄ります?」

「ええ」

社交辞令のつもりで言った僕の言葉を、淑恵は素直に受け止め、受け入れてくれた。

僕は淑恵を部屋に招き入れ、淑恵は僕の部屋に足を踏み入れた。

僕は淑恵の腰に手を回してエスコートすると、淑恵は僕の肩に寄り掛かってきた。

僕はそのまま、淑恵を抱き締めた。

淑恵は僕の方へ向きを変えて僕の方に手を回した。

一瞬見詰め合った後の僕と淑恵は、キスをしていた。

唇が離れた後にまた一瞬見詰め合ってから、僕と淑恵はきつく抱き合った。

もう一度見詰め合った時、淑恵は頷いた。

僕は部屋の明かりを消した。

…これが、僕と淑恵の最初の出会いだった。

僕がミルクを入れた深入りのコーヒーを飲み干した時、淑恵もダイジリンのミルクティを飲み終えたところだった。

「ご馳走様でした」

そう言って、淑恵は手を合わせた。

「いつも淑恵はそうだね」

僕がタバコを燻らせながらそう言つと、淑恵は手を合わせたまま、顔をこちらに向けた。

「ええ、そうよ。食べ物に感謝するのは大切よ」

朝食を摂った後、一旦部屋に戻って荷物をまとめてから、フロントに向った。



「チェックアウトを」

僕はフロントにカードキーを渡しながらそう告げた。  
フロントは一礼すると、カードキーを受け取ってから、奥の事務室へと消えていった。

その時に、淑恵は僕にさりげなくお金を握らせた。

僕はそれを受け取らないようにした。

「いいよ。僕が払うよ」

そう言って僕は淑恵の顔を見た。

淑恵は笑顔で、首を横に振りながら言った。

「ダメよ、それは。『大人のお付き合い』なんだから」

フロントが明細書を提示した時に、淑恵はカウンターにお金を置いた。

淑恵の置いたお金は、支払額のほぼ半分だった。

僕は、淑恵を睨みながら足りない分を支払った。

フロントを離れて、淑恵とホテルの玄関に向かう途中で、淑恵は口を開いた。

「娘に言われているのよ」

僕は淑恵に尋ねた。

「何て？」

淑恵は、僕の方をチラリと見た。

「恋愛は『イーブン』らしいわ、娘によると」

「だから『お金もイーブンよ』って」

僕はアゴに手を当てて応えた。

「ふん」

僕の反応に、淑恵は「フフフ」と笑った。

「馴染めないかしら？」

僕は首を横に振った。

「うつん、そんなことは無いよ」

「でも、淑恵の前ではカッコ良い僕で居たいな」

淑恵は噴出した後に言った。

「そんなこと、関係ないわ。そのままの貴方なら」  
僕は照れて、淑恵から顔を逸らした。

ホテルの玄関の自動ドアが開いて通りに出たところで、僕と淑恵は別れた。

次に逢う約束を確認してから。

「それじゃあ、10日後の土曜日ね」

「時間は同じだよ」

「場所も同じね」

「ああ、そうだよ」

にこやかに淑恵は手を振った。

僕も手を振った。

## 次の約束（後書き）

『Interlude of Love』の第1章、完結です。  
よろしければ、感想や意見をお願いします。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n6211m/>

---

Interlude of Love 1

2010年10月8日14時01分発行